

2016 年度 緊急助成

## 島嶼生態系の外来種問題を考えるシンポジウム全国展開

日本自然保護協会・世界自然保護基金ジャパン  
島嶼生態系の外来種問題を考えるシンポジウム実行委員会  
安部真理子<sup>1</sup>・権田雅之<sup>2</sup>・岩橋大悟<sup>1</sup>・草刈秀紀<sup>2</sup>・  
辻村千尋<sup>1</sup>・並木 崇<sup>2</sup>

キーワード：侵入経路管理の強化，IUCN，教育用ツール，世界自然遺産

### 1. はじめに

外来生物が大きな環境問題であることは、国際的に広く認識されており、生物多様性条約では第10回締約国会議にて採択された生物多様性新戦略計画（愛知目標）の目標9には「2020年までに、侵略的外来種の制御、根絶、又は定着経路の管理を行う」と掲げられている。

日本自然保護協会は、外来種問題を重視し、世界自然遺産地域の小笠原諸島での外来種対策や、アカミミガメの国民への周知などを自然調べなどのプロジェクトを活用しつつ、問題解決に取り組んできた。

世界自然保護基金ジャパンは、外来生物法の法定化において国会で意見を陳述し、外来種被害防止行動計画の策定に委員として意見を述べなど、問題解決に取り組んできた。

しかし、国民の理解が深まったとは言えない状況が続き、現在も外来種の違法な持ち込みや野外への逸出が繰り返されている。特に島嶼での外来生物の影響が深刻な状態であることは小笠原や奄美諸島、琉球列島で顕著に表れている。こうした現状を根本的に解決するために、団体

の枠を超えた連携した活動が必要との認識から、今回の島嶼生態系の外来種問題を考えるシンポジウムを企画することとした。特に、一般市民への普及は、非意図的な持ち込みや、持ち出しなどの防止に効果があることが、小笠原諸島での取り組みでわかってきたところである。したがってシンポジウムは、研究者や保護団体、行政関係者のみで行うのではなく、島嶼部での一般市民を巻き込むシンポジウムの開催が重要と考えた。その前段階として広く国民への広報の意味で、東京でのシンポジウムの開催も重要と考えた。

本年9月に開催されたIUCN（国際自然保護連合）第6回締約国会議にて日本自然保護協会、WWF ジャパンなど日本の自然保護団体6団体の提案による勧告「島嶼生態系への外来種の侵入経路管理の強化」が採択された。

同勧告では日本政府に対し、生物地理区分を超えて物資を運ぶことは、外来種侵入の大きなリスクを伴い、クリアするには多くの要求を満たさなければならないことを認識するよう促している。

1: 公益財団法人日本自然保護協会 2: 公益財団法人世界自然保護基金ジャパン  
2018. 3. 6 受付 2018. 12. 20 公開

本計画は、IUCN 勧告を受けて、東京と奄美・琉球諸島にて外来種対策の予防に焦点を置いてシンポジウムを開催し、国連 CBD 事務局が作成した外来種問題のツールキットを翻訳し、その抜粋版を学校などでの学習用としても使用できる資料として制作することを目的に実施した。

## II. 東京でのシンポジウム開催

基調講演に五箇公一氏（国立環境研究所）、話題提供として佐々木健志氏（琉球大学農学部博物館）、権田雅之氏（WWF ジャパン）、安部真理子氏（NACS-J）、パネルディスカッションコーディネーターとして草刈秀紀氏（WWF ジャパン）というメンバーで、2017年2月25日に、中央大学駿河台記念において開催した。当日は100名を超える参加者でこの問題の関心の高さが表れていた。

基調講演のなかで五箇氏は、外来種により世界の生物多様性が損なわれてしまっている現状が事例で紹介された。クワガタムシは種類ごとに異なったダニが寄生しており、種の分化が進むと同時に寄生するダニの種も分化していることなどが紹介され、1種1種の種の存在が、どれほど生物多様性に大切な存在なのかを伝えると同時に、外国産のクワガタムシを輸入し野外に放つことは、それらの営みを壊すことになってしまうことなど、精度の高い調査データを用いた基調講演だった。また、カエルツボカビ病や植物のクズなどの事例から、国内の在来種を外国に持ち出すこと（意図せざる場合も含め）の問題点などの解説もあった。

日本自然保護協会の安部氏は、辺野古の埋め立に使う土が、沖縄本島以外から運ばれつつある現状の紹介があり、生物地理区分や気候帯の異なる場所からの土砂の搬入も予定されており、やんばるの森が世界遺産登録の機運も高

まっているなか、外来種対策のあり方も問われていることを浮き彫りにした。

琉球大学風樹館の佐々木健志氏は、沖縄県内では、既に1200種類を超える外来種が定着していて、農作物や野生生物に影響を与えている実態の報告があり、沖縄島や奄美での、マンガースの導入という意図的な外来種の導入の問題点も指摘された。

WWF-Jの権田氏は、アマミノクロウサギの保護のためのマンガース対策が効果を上げていることなどを、具体的な事例をから報告された。

パネルディスカッションでは、会場から多くの質問が寄せられ、特に沖縄の外来種問題を心配する声も多く、島嶼では外来種侵入の「予防」が大事だと確認されその危険性が高いことの認識も共有された。

## III. 沖縄でのシンポジウム

2017年5月27日、那覇市の屋良ホールにて開催した。当日の話題は、「沖縄の自然と文化の多様性」盛口 満（沖縄大学）氏、「外来種は何が問題なのか？～沖縄での事例をもとに～」佐々木健志（琉大・風樹館）氏、「マンガース、ノイヌ、ノネコ問題～終わりなき戦いを終わらせるために～」長嶺 隆（NPO 法人 どうぶつたちの病院 沖縄）氏、「沖縄県の外来生物対策について」德里政哉（沖縄県自然保護課）氏、「地域と連携し、橋渡しする外来種問題対策の重要性－奄美群島でのアプローチ」権田雅之（WWF ジャパン）氏、「IUCN 世界自然保護会議での勧告について」安部真理子（日本自然保護協会）氏という構成であった。同日に別の大きな大会があった中ではあるが70名を超える参加者で、沖縄でも外来種の関心が高いことがうかがえた。

自然は人の暮らしと文化も含めておりなされるものであり、如何にそれを後世に引き継いで

いくことが困難であるかが浮き彫りとなった。また、教育現場による外来種問題という課題も提起された。

#### IV. 奄美大島でのシンポジウム

東京、那覇と開催してきた外来種問題を考えるシンポジウムのシリーズ最終回を2017年12月17日に奄美市で開催した。当日はWWFジャパン、NACS-Jのほか、地元で外来生物問題に取り組むNPOからも事前の告知・広報作業から協力・参加していただいた。

今回の企画では、国際的視点からの情報提供のほか奄美大島のローカルな取り組み紹介など、多方面にわたる話題を取り上げ、来場者からは活発な質問と共に関心を得ることもできた。

奄美大島では長年、島嶼生態系としてマングースをはじめとした外来生物の影響にさらされてきた。近年では新たな外来生物問題となっているイエネコの問題と対策が求められている。

そこで奄美大島でのシンポジウムは、IUCN決議や生物多様性条約事務局の取り組みを通じ、国際的課題としての島嶼地域での対策の重要性や、今後の世界自然遺産登録に向けた人類の宝としての自然の価値を説明。また地元の写真家でもある常田 守氏による解説とイエネコの問題に取り組む地元団体や中学校の生徒による活動の発表を通じ、参加住民に問題への関心と活動への参加協力の拡大をめざした。

事前の新聞・ラジオなどの告知の効果もあり

会場は立ち見となるおよそ70名ほどの来場者を得ることができた。

また開催の様子は、地元2紙（南海日日新聞及び南日本新聞）の各一面で紹介され、世界遺産に向けたタイミングでの企画開催として、広報効果も得られた。

今後も引き続き、地元の団体と共に、島内の他町村において開催を拡大していくことや、地域ごとの学校や協力住民を通じ、外来生物問題について、喚起する企画の実施支援を行っていく。

#### V. 最後に

今回のシンポジウムを通じて、国民の間での外来種問題への関心の高さがうかがえたことは大きな成果であった。同時に、生物多様性保全に関する関心はまだまだという実感も得られた。外来種は、野生化したネコのように愛玩動物においても顕在化している課題であるため、身近に感じる方も多いと思われるが、その外来種対策で保全されるべき地域の固有の生態系の重要性については必ずしも意識の共有ができていない。このため、目標とすべき外来種駆除の方向性に、立場による違いが生じている現実がある。奄美大島で開始されるノネコの駆除事業の展開によりこの問題はより顕在化するものと思われる。また、人の経済活動が行われる限り新たな外来種問題の発生は防ぐことができないという現実もあり、如何に入れないかというシステムのより厳格化及び初期検知システムの構築が重要である。

2016 Urgent Grant Programme

## Symposium to think about alien species problems of island ecosystems

ABE Mariko, GONDA Masayuki, IWAHASHI Daigo,  
KUSAKARI Hideki, TSUJIMURA Chihiro and NAMIKI Takashi

Keywords: To strengthen the management of the invasion route, IUCN, Educational tools, World Natural Heritage